

機関番号：32608

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20730513

研究課題名 (和文) 幼児の安全教育に関する発達心理学的研究

研究課題名 (英文) Psychological study of safety education for preschool children

研究代表者

河原 紀子 (KAWAHARA NORIKO)

共立女子大学・家政学部・専任講師

研究者番号：90367087

研究成果の概要 (和文)：本研究では、幼児の安全教育のあり方について明らかにするために、幼児と保育者を対象に危険な場所・物について尋ねる調査を実施した。その結果、5歳以上になると、幼児と保育者の危険性の認識が一致し始めること、5歳後半以降には経験したことがない遊びは「危ない」といった危険性の認識に一貫性が見られるとともに、物理的環境における危険性を相対的に捉え始めることなどが明らかにされた。これらより、幼児の認識の発達を考慮した安全教育の重要性を指摘した。

研究成果の概要 (英文)：The purpose of the present study was to explore an effective method of safety education for preschool children. Perception of children and nursery school teachers about danger in place and objects around them was investigated. Results revealed that the perception of the children began to accord with that of the teachers after 5 years. The children over 5 and a half years showed consistency in their perception that plays never experienced are dangerous, and began to understand that danger in physical environment is conditional. These suggest an importance of taking development of recognition into consideration of safety education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・幼児教育・保育

キーワード：幼児、安全教育、危険性、事故、インタビュー、活動量

1. 研究開始当初の背景

近年、保育園・幼稚園における危機管理

や幼児の安全教育についての関心が高まっている。子どものために安全な環境を用

意する配慮は必要であるが、完全に安全な環境というのは不可能である。そうであるならば、子どもが危険な状況をいかに認知し、それに対処する能力を身につけていくかということが重要な課題となる。さらに言えば、子どもが遊具、モノ、場所で事故に遭遇するという事は、マイナスな面ばかりでなく、実は子ども自身の遊びの創造性や好奇心など積極的な側面として捉えることもできる。つまり、子どもの事故の問題はおとなが用意する環境やモノを、子どもがどう受け入れるのか、能動的に活動する子どもと環境とのコンフリクトと捉えることが重要である。

幼児の安全教育に関するこれまでの研究では、事故やけがの発生に関する要因（石樽・石樽，1991；澤田・川口・奥野，2003）やその防止策についてさまざまな検討がなされてきた（田中，1995；佐野，2007；荒木・相墨・荒屋敷，2001）。中でも、発達心理学的研究では、児童誘拐事件の多発を背景に、見知らぬ人物に対する認知が子どもの年齢によって異なることなど対人的側面に関する検討がなされてきた（江尻・内田，2006；内田，2007）。

しかし、幼児の安全教育は対人的側面だけではなく、けがや事故、危険な場所に関する認知など対物的側面が忘れられてはならない。幼児が危険な場所をどのように認知しているのか、それを発達的に把握することが幼児の安全教育のあり方を明らかにする上で不可欠であると思われる。

2. 研究の目的

本研究では、幼児の安全教育のあり方について明らかにするために、幼児の危険性の認識について、対物的側面に注目して発達的に検討することを目的とする。そのさい、年度途中での園舎移転に伴う幼児の環

境適応に注目する。具体的な目的として以下の3点が挙げられる。

(1) 保育者の危険な場所についての認識および配慮事項

安全教育の実施者である保育者が園舎の危険な場所・物についてどのような認識を持っているのかを明らかにするとともに、その場所・物を幼児がどのように認識しているのかを捉える資料とする。

(2) 幼児における危険性の認識

①横断的研究 園舎移転に伴い新たな環境適応が求められる過程で、幼児が危険な場所・物や遊びに伴う危険についてどのように認識しているのか、その発達的特徴について横断的データにより明らかにする。

②縦断的研究 新入園児が新たな環境に適応していく過程で、危険な場所・物や遊びに伴う危険をどのように認識していくのか、その発達プロセスを縦断的データにより明らかにする。

(3) 幼児の日中における活動量

子どもの活動量のピークは、保育園児のけが・事故発生のピークとほぼ対応し、子どもの活動が活発になる時間帯は、けが・事故発生の危険性も高くなるということが明らかにされている。これを踏まえ、新入園児を対象に活動量の測定を行い、基礎的データを収集する。

3. 研究の方法

(1) 保育者の危険な場所の認識および配慮事項についての調査

調査対象者：埼玉県下の公立 A 保育園 3, 4, 5 歳児クラスの正規保育士および看護師、計 10 名。

調査期間：園舎移転から約 1 か月後。

手続き：保育者に「新園舎で子どもたちにとって危ない場所はどこですか」「どうしてそこは危ないですか」などについての質問紙

を記入してもらい、回収時に記載内容（どの場所か、どの遊具かなど）について、補足的にインタビューを行うとともに、幼児に対してけが・事故が起きないように伝えている配慮事項について尋ねた。そして、その場所・物をデジタルカメラで撮影した。

(2) 幼児の危険性の認識についての調査

①横断的研究 対象児：埼玉県下の公立 A 保育園に在籍する 3, 4, 5 歳児クラスの幼児（男児 29 名・女児 21 名、4:05~6:04）、計 50 名。

調査期間：園舎移転 1 か月以上経過した後
に順次実施。

インタビューの手続き：保育園の一室で幼児とインタビューア一対一でのインタビューを実施した。この場面はデジタルビデオで録画された。インタビュー内容は下記のとおりである。

i 園舎の物理的環境に対する幼児の認識
(1)の結果をもとに、A 保育園内 8 か所（ジャングルジム、側溝など）の写真を 1 枚ずつ対象児に見せ、その場所・物が「危ないか、危なくないか」などについて尋ねた。

ii 「すべり台」の遊び方に見る幼児の危険性の認識 「すべり台」という遊具の遊び方（9 パターン）について、その経験の有無、そのときの感情、その遊び方が「危ないか、危なくないか」などについて尋ねた。

②縦断的研究：対象児：上記保育園に 2009 年度および 2010 年度に新規に入園した 3 歳児クラスの幼児、計 13 名（男児 8 名・女児 5 名）。

調査期間：入園から 1 か月後およびその半年以上経過した時期。インタビューの手続きおよびインタビュー内容は①と同じ。

(3) 幼児の日中における活動量の測定および行動観察

対象児：②のうち装着が可能であった幼児 8

名（男児 5 名、女児 3 名）。行動観察は女児 1 名のみ実施した。

手続き：対象児の登園直後、アクティグラフという腕時計型の器具を非利き手に装着し、降園まで原則として装着し続けてもらう。幼児が嫌がった場合には無理強いせず一度はずし、しばらく後に再装着を試みる。また、行動観察については、子どもの行動およびクラス全体の活動をできるだけ妨げないよう配慮し、対象児と対象児に関わる子ども、保育者の様子も入るように撮影した。

4. 研究成果

(1) 保育者の危険な場所についての認識および配慮事項

保育者が認識する危険な場所・物として、園庭にある大型遊具（すべり台、ジャングルジムなど）、段差のある場所（階段、玄関など）、開閉により手指が挟まる場所（戸や扉など）、すべる場所（廊下、トイレなど）が上位に挙げられた。この中から 3 名以上が危険な場所・物とした箇所を中心に幼児に提示することとした。また、配慮事項としては見守りや声かけによる注意喚起などが挙げられた。

(2) 幼児の危険性の認識について

①横断的研究

i 園舎の物理的環境に対する幼児の認識

保育者が「危険な場所・物」と回答した 8 か所のうち 7 か所について、年長児および年中児の約半数以上が「危ない」と答えた。それに対し、年少児では「すべり台」「テラス」「側溝」など、5 箇所について「危ない」と答えた幼児は半数以下であった。一方、「階段と通路の交差点」（図 1）での注意事項については、いずれの年齢でも 80~90%の子どもが「気をつけていることがある」と答え、その情報源は「先生」であることが明らかにさ

れた。このことから、大人が意識的に注意をしている場所であれば年少児（4歳）から危険性の認識はあるが、年中・年長（5歳以上）になると、保育者の危険性の認識とほぼ一致し始めることが示された。しかし、危険性の認識と実際の行動にはズレがあることも観察され、安全教育の実施のうえで考慮が必要であることが示唆された。



図1 写真（階段と通路の交差点）の例

さらに、危険な場所・物8か所のうち、「危ないか、危なくないか」と尋ねられたさいの幼児の回答・説明のうち、「ちょっとだけ危ない」「～のときは危ないけど、～したら危なくない」といった相対的な危険性の表現の有無に着目してプロトコル分析を行った。その結果、いずれかの場所・物に相対的な危険性の表現をしたのは、5歳後半以降（年中・年長）の幼児に多かった。相対的表現の最も多かったのは「ベランダ」（20名中9名）で、具体的には「（ベランダの柵に）乗ったたらちょっと危ないけど、ここで（柵の）隙間かとかで（外を）見れば危なくない」、「押されて落ちると危ないけど、自分でこっから飛び降りるのは危なくない」などの表現が見られた。次いで多かったのは、「コンクリートの段差」「壁の凹凸部」（5名）であり、これらには「ちょっと危ない」という回答がほとんどであった。この2か所はいずれも保育者が「角」の危険性を指摘していたが、幼児は必ずしもそこには注目していなかった。これについて

は今後さらに詳細な分析が必要である。

ii 「すべり台」の遊び方に見る幼児の危険性の認識

「すべり台」の遊び方（図2）に注目し、幼児の危険性の認識について、経験したことがある遊び方のバリエーションや「楽しさ」の感情との関連を検討した。その結果、年長児になると、経験がない遊び方は「危ない」と認識していること、「危なくない」と認識している遊び方は「楽しい」と感じていることなど、経験の有無や遊び方の楽しさとの関連で、危険性の認識について一貫した傾向が見られるようになることが明らかにされた。また、保育者には「危ない」と認識されているが、幼児にとって楽しくかつ「危なくない」といった「遊び方」の特徴も示された。



図2 「すべり台」の遊び方の図版

さらに、「すべり台」の遊び方9パターンのうち、iと同様の相対的な危険性の表現の有無についてプロトコル分析を行った。その結果、相対的表現をした幼児は、5歳後半以降（年中・年長）に多かった。相対的表現の具体例としては、「長いズボンなら平気だけど、短いズボンじゃ平気じゃない」、「赤ちゃんにとっては危ないけど、大人とか〇〇組（年長）なら危なくないと思う」などであった。

以上のように、5歳以上になると、幼児と

保育者の危険性の認識が一致し始めること、5歳後半以降には経験がない遊び方は「危ない」と回答するなど危険性の認識に一貫性が見られるとともに、物理的環境における危険性を状況や場合によって異なると相対的に捉え始めることなどが明らかにされた。

②縦断的研究

現在分析中であるが、予備分析の結果から、園舎の物理的環境に対する幼児の認識について、入園から約1,2か月という時期には、写真の場所を知らない、わからないという回答が見られること、また、保育者の回答した「危険な場所・物」を危なくないと答える箇所が初期には相対的に多い傾向が見られた。

「すべり台」の遊び方については、9パターンのうち経験したことが「ない」と回答する遊び方が多い傾向が見られた。また、5歳後半以降の事例に危険性についての相対的表現の使用が見られ、今後詳細な分析により、横断的研究との関連を検討することが課題である。

(3) 幼児の日中における活動量

幼児の活動量については、9～10時前後と16時頃にピークが見られることが特徴であった。これは、これまでの調査と共通の結果であった(河原・根ヶ山, 2011)。今後の分析では、活動量の高さと危険性の認識との関連について検討する必要性が示された。

以上のことから、幼児への安全教育においては、幼児の危険性に対する認識の発達、すなわち、5歳以上になると、幼児は大人がもつ危険性の認識と一致し始めること、さらに5歳後半以降には経験したことがない遊びは「危ない」といった危険性の認識に一貫性が見られるとともに、物理的環境における危険性を相対的に捉え始めるといっ

た特徴を踏まえた対応が重要であると考えられる。従って、4歳から5歳半ばまでは危険な場所・物について、危ないか危なくないかといった明快な説明が、そして5歳後半以降には状況によって異なる柔軟な対応の必要性や安全を確保するための基準の提示といったことが有効になるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①河原紀子, 保育園における乳幼児の食行動の発達と自律, 乳幼児医学・心理学研究, 18(2), 117-127, 2009, 査読無

②根ヶ山光一・河原紀子・福川須美・星順子, 家庭と保育園における乳幼児の行動比較: 泣きを手がかりに, こども環境学研究, 4(3), 41-47, 2008, 査読有

[学会発表] (計9件)

①河原紀子・根ヶ山光一, 幼児における危険性の認識(2)プロトコルの分析から, 日本発達心理学会, 2011年3月27日, 東京学芸大学

②河原紀子・根ヶ山光一, 幼児における危険性の認識, 日本発達心理学会, 2010年3月28日, 神戸国際会議場

③根ヶ山光一・河原紀子, 離島と都会の保育園・小学校における事故の比較: 災害報告書の分析から, 日本心理学会第72回大会, 2008年9月21日, 北海道大学

④Negayama, K., Kawahara, N., Hirose, M., & Powers, N. Cross-cultural comparison of nursery staff's tactile tactics to put children into sleep between Japan and Scotland. 20th International Society for the Study of Behavioural Development Meeting, 2008年7月15日, Würzburg

⑤福川須美、斉藤多江子、根ヶ山光一、河原紀子, 家庭型保育室と家庭における幼児の行動の試行的研究, 日本保育学会第61回大会, 2008年5月18日, 名古屋市立大学

[図書] (計4件)

①河原紀子(監修・執筆) 港区保育を学ぶ会(執筆), 0～6歳子どもの発達と保育の本, 学習研究社, 2011年, 全96ページ

②河原紀子・根ヶ山光一, 第3部第9章「保育園におけるアロマザリング」, 根ヶ山光一・柏木恵子(編著) ヒトの子育ての進化と文化: アロマザリングの役割を考える

(p.185-300) 有斐閣, 2010年, 全303ページ

③河原紀子, 第2部第1章「人間関係の礎を築く保育: 乳児期の保育課題」, 石黒広昭(編著) 保育心理学の基底 (pp.90-115) 萌文書林, 2008年, 全285ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河原 紀子 (KAWAHARA NORIKO)
共立女子大学・家政学部・専任講師
研究者番号: 90367087

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし